

死五人、生存三人だけでした。他の部隊では、戦友会がありますが、私の隊では消息不明者ばかりで会が成り立ちません。六十年前の記憶で、たまたま電話すると「私のところは戦死しておりません」との返事です。

## 空腹だった

### ビルマ戦線従軍記

福岡県 久富 幸夫

私は大正十一（一九二二）年二月一日、福岡県山門郡瀬高町大字高柳で生まれました。

私が軍隊に入ったのは、昭和十八（一九四三）年四月十日、久留米の野砲兵連隊へ初年兵として入営を致しました。

入営をしました当時の私の家庭の状況は、

父 健在 農業  
母 “ “

長男本人 “ “  
次男 “ “  
叔母兄妹 “ “（寡婦）夫は戦死  
妹 “ “ 小学生

でした。我が家は元禄時代より続いた代々の富農の家系で篤農家と評されていました。当時は農地六町歩を、その内自作は三町歩余でした。以上の実態で私が軍隊に入るとは、労働力に大穴があいてくるので、家にとっては苦しいことでした。

時局柄祖国は大戦に突入して、国運の興廃に総動員の御奉公の真只中です。男子の本懐と誓って勇躍家郷を後にしました。

同じ日に入営した町内の壮丁は四人。歓呼の聲、打ち振る旗の波、町の各界代表者の激励、この状況は既に六十年を経た現在でも、克明に記憶に残っております。余談ながら四人の半分の二人は、残念にも名誉の戦死。私ともう一人が無事に復員生還できて、武運長久を家族と共に感謝しております。

いよいよ軍人です。隊内での労苦の最たるものは、裸馬の乗馬訓練でした。鞍をおかない裸馬に乗り、脚をしめて、腰を浮かし、馬の背骨と人の尾底骨の摩擦を防いで苦痛を防ぐことは、口ではたやすく言えても、実際はもう苦痛の極みでした。人の内股、尻は赤く内出血、皮がむけてジュクジュクと体液が出る。入浴はしなければならぬが、熱い湯がかかると、アッと叫んで死ぬ程辛い目に合う。

これを持ち越えて、苦痛を征服せぬと一人前ではない。そして馬そのものの世話、手入れ、その他の役務も大変である。しかし、私の実家では農家の常として牛や馬を飼育していたので、そちらのお務めは難儀ではなかった。

次は内務班のことです。巷間伝えられるような苛酷な制裁、いじめはなかったが、内地にいる約三カ月の間、数回の対抗ビンタと称する初年兵が横一列に並んで向かい合い、前の者のビンタを取り合う悪い習慣を経験した。隣町出身の二年先輩

の人で、中隊長の当番をしている、私を大事に可愛がってくれた人が、「ちょっとこい。あれを手伝え、これをせよ」と適当に隊内から外へ出してくれて、制裁、体罰、しごき等から外してくれて大変助かりました。何しろ、中隊長の当番が庇ってくれるので、誰も文句のつけようがない。

こうして毎日多忙で、兵営生活に馴れた三カ月後に第一期の教育が終わり、いよいよ南の戦地へ出征となりました。

昭和十八年七月、博多港より乗船、シンガポールへ。対空対潜監視を厳にして船団を組み、海軍の護衛をたのもしく、かつ謝意をこめて見ながら、途中恙なくシンガポールへ入港上陸した。

同市の南兵営に入り、四十日間駐屯した。この間教育訓練に励んだが、何しろ赤道直下の暑さ、この暑さに馴れることが先決。それとマラリアその他の病気に負けぬようにと、新しい環境に慣熟するべく内地では考えられぬ事が多かった。

やがて十月頃、シンガポール、ラングーン、マ  
ンダレー、ラレオとビルマ国を奥深く北上、中国  
との国境に近いラシオを経て、クットカイへ着  
く。やっと龍兵団野砲兵第五十六連隊第一大隊第  
三中隊に編入された。ここで山岳地帯のためか野  
砲より山砲に替わった（地形上か）。警備駐屯中、  
山砲の教育を受ける。砲を分解して馬にのせる。  
人力搬送等である。また、軍馬を購入した。馬の  
係を命ぜられる。馬の世話は実家でも、久留米の  
隊でも馴れていたもので苦にならなかった。

中隊は古兵ばかりで、昭和二十一年六月、浦賀  
に復員上陸、解散までずうーっと初年兵で苦勞し  
ました。途中で二回補充兵が来ましたが、年寄り  
の兵隊ばかりで、全員戦死してしまっただけ。いたま  
しいことです。

駐屯地では食料不足が最大の悩み、何しろ戦地  
では現地調達が建前でした。兵の三分の一の人員  
は毎日食料さがしでした。人間の食料難と同じく  
馬も食料難で、御者班では馬の世話、自身と馬糧

の準備で大変な苦勞でした。ただし砲身の人力で  
の搬送は少なかった。地形は岩山の中の岩道なの  
で、馬の蹄鉄に草鞋わらじを作ってはかせなければなら  
ぬ。これはまた苦勞でした。軍隊広しといえども  
馬のワラジの材料、製作、装着等に苦勞させられ  
た隊は極めて少ないことでしょう。とにかくビル  
マ戦線での最大の苦しさは食料難による空腹であ  
りました。

昭和十九年四月上旬、駐屯地のクットカイを出  
発し、徒步行軍で集結地の騰越に向かう。支那の  
雲南省の山間を走る援蔣ルート破壊のため、ビル  
マ領より支那領に侵入して、畹町―遮放―芒市  
―竜陵―騰越と進み、騰越―江萱街―怒江右岸と  
標高三〇〇〇―四〇〇〇メートルの高黍貢山系、  
岩石の山道、積雪あり、山砲を分解して馬の背と  
人力により山越え、馬にも滑り止めの草鞋を履か  
せる。大塘子に到着、集結。直ちに怒江、ダイシ  
ヤク渡河点の攻撃。怒江左岸、敵の観測所、指揮

所、主要陣地砲撃、彈藥集積所、物資集積所爆発炎上させる。戦果拔群。

この戦闘について考えると、昔の源平の合戦でのひよどり越えの逆落としを思い起こす。地形上絶対敵の来ぬ難所へ、意表をつけて大奇襲をかけた全滅させた、歴史に残る戦いである。

このビルマ国境より東の支那領内で三〇〇〇〜四〇〇〇メートルの高嶺を砲を担いでよじ登り、敵の意表をつく大戦果である。まさに鬼神のごとき離れわざであった。

大塘子―高黍貢山系登破―江萱街着。紅木樹にて久留米の第一四八歩兵宮原大隊に配属され、紅木樹東方の怒江の惠通橋渡河点攻撃、撃破後大塘子へ。

五月十日、大塘子にて第一次敵の総反攻開始。

五月十一日〜六月六日、歩兵と共に、陣地も地形地物を利用し、移動防戦を続ける。零距離射撃もしばしば、彼我入り乱れての白兵戦、右手に軍

刀、左手に手榴弾、歩兵部隊と共に逐次後方へ移動した。

大塘子―高黍貢山系―馬面関―橋頭街―瓦甸―江萱街へと。この間工兵隊の二〇〇メートル先の障害物の爆破もあり、歩兵も山砲も大感謝である。

六月二十日、江萱街―騰越―龍陵。竜陵守備隊救出作戦参加。

七月三日より七月十四日、芒市東北方地区掃討作戦及び平憂救援作戦及び芒市警備。

竜陵―芒市―平憂

平憂―芒市 警備

無理と難路のため疲労困憊、軍馬の大半が倒れ、使用不能となり、愛馬と涙の別れをなし、山砲は分解して芒市までほとんど人力で運搬し、無事帰還した。

この時期頃より、戦局は形勢逆転、拉孟玉碎、騰越玉碎、全軍逐次撤退する。

九月以来、友軍の援護、救出、対敵作戦と東奔西走する。食無く、弾は一日三発の最後まで奮戦する。敵は山の形が変わる程弾丸を射ち、物量の豊富さを誇示するように攻勢を続けた。そのため我が軍は一発射つと直ちに陣地交換をしないと、数百発の敵弾が来るのだ。もはや勝負はついていると判っていても、口に出すことはできぬ。その上雨季である。雨具はなく、濡れるに任せる外はない。木陰岩陰でしのぐ。

八月末より九月まで断作戦第一期。芒市―竜陵―騰越道奪取―芒市。

竜陵周辺の攻防戦では逆に感状を受ける。(蔣介石より「実によく善戦健闘して、その功績は敵味方を通じて最高。よって敵味方の別を越えてその戦闘に対して感状を授ける」というもの)

九月十五日より十一月二十日まで、芒市東北作戦、平憂救出竜陵の攻防、撤退、芒市撤退。

九月二十一日、平憂守備隊救出成功。

十一月六日、竜陵撤退。

二十日、芒市撤退。遮放峠の攻防、迎撃戦、砲弾欠乏。

十二月二十日、畹町へ撤退、国境の町、援蔣ルート。

十二月二十一日、ナンカンへ瑞麗江左岸に展開、物量に物言わせ密林も敵の砲撃でハゲ山と化す激戦。ナンバックカ西方戦闘。魚大量捕獲、空腹を満たす。

昭和二十年二月八日、畹町撤退。三月上旬ラシオ撤退、ラシオでは豪邸に泊まる。総統の別邸と後で知る。素晴らしい一泊。

三月下旬より六月上旬  
シポウ撤退。ウエットピー七曲においてメークテラー方向からの敵機甲部隊の進攻を防御。

八月十五日  
ロイコウ西方にて終戦。武装解除。

九月下旬 チェンマイ(タイ国)到着。(一カ

月駐屯)

以後タイ国のチェンマイに向かい行進開始。怒江下流サルウィン川で軍馬七頭ほか持ち物を兵補ロレンツに渡し涙の別れをする。

サルウィン川を渡河、山中を切り開き、時計、万年筆、双眼鏡等を食料に替え、虎、豹（ヒョウ）等の出現に僅か数丁の銃を頼りに警戒に当たり、ようやくチェンマイ郊外の露営割当地到着（九月下旬）。

十一月、ナコンナヨーク集結命令を受ける。食なく、道なきジャングルを切り開き、昼は炎暑、夜行軍を主に十二月ナコンナヨークに到着し、ここで昭和二十一年五月中旬まで駐留する。

昭和二十一年五月十四日、ナコンナヨーク出発、バンコクにて乗船。二十四日出発。

二十一年六月十七日、浦賀に上陸帰還する。終戦後マラリアにやられ、薬はなし、今考える

と「よくまあ、生きていたものよ」と不思議に思える。帰還後マラリアには数年間は悩みました。

また終戦後約一カ月位の間、食べ物がなくて、毎日水を呑んでは木の根をかじって飢えをしのいだこともありました。

どうか飢えや病気に勝って生き永らえて帰国できた幸せを、毎日お礼の感謝でいっぱいです。帰宅した時、母は直ぐには家の中へ入れてくれず、家の外で着ているもの全部を脱いで、シラミ対策をした上で、入浴させられました。脱いだ衣料はすべて大きな釜で煮沸消毒をして、シラミを殺しました。帰宅して食事もすべての生活も正常で良好な条件に戻り、体力も回復し健康体になりました。有難いことです。

復員後、昭和二十四年四月に結婚し、一男三女をもうけ、孫は現在十二人です。老妻も子も孫も皆元気で頑張っております。そして

農事組合長 四期八年

区長（隣組長） 一期

結婚の仲人 十五組。

家業は長男がまもってくれ、茄子のハウス栽培に励んでおります。

以上を総括しますと、遠くビルマの奥地まで戦務に追われて、空腹の思い出以外あまり強い印象がない程、強い空腹の従軍生活でした。